

直接鳥をみて歩かない調査Ⅱ〈自動撮影〉

森 茂晃（ホシザキ野生生物研究所）

鳥類の調査研究で基本となる「観察」。直接フィールドに出かけて対象を見つけ、種類を識別して数をカウントしたり、行動や生息環境などを記録したりすることで様々なことがわかってくる。

ホシザキグリーン財団の2つの公園施設、宍道湖グリーンパークとふるさと尺の内公園では、それらが持つビオトープとしての機能を計る意味でも直接観察による調査を長年続けている。そして、数年前から自動撮影や自動録音による調査も取り入れはじめた。昨年の報告会では、自動撮影は草むらなどに潜んで観察しにくい鳥類をセンサーカメラで記録した事例、自動録音は夜間の鳴き声の記録について紹介した。今回は、尺の内公園においてセンサーカメラを用いたオシドリの飛来状況のモニタリング結果について報告する。

ふるさと尺の内公園には人工の池や小川はあるもののそれらは狭く、敷地の面積（約2.6ha）からもオシドリが生息するような環境ではない。また、本種が確実に生息している斐伊川からは約1.5km離れている。その公園では、2005年からラインセンサス法などによる鳥類調査を継続しているが、2020年までオシドリが園内に飛来することには気がついていなかった。その理由の一つは、目視による観察が困難なほどの暗い時間帯に飛来していたからであったが、夜間も撮影可能なセンサーカメラを用いることで、24時間のモニタリングが可能となり、その実態が明らかになってきた。センサーカメラを設置した4シーズン（①2020.3/②2021.1~3/③2021.11~2022.3/④2022.11~2023.3）の撮影画像（638枚）を改めて整理したところ、僅かな例外はあったものの、ほぼ日の出前と日の入り後の時間帯に飛来していた。オシドリは地上に降りて落ちているドングリを採食しており、時には数十羽の群れが記録されていることもあった。

オシドリは、環境省レッドデータリストでは情報不足、島根県では準絶滅危惧種に挙げられている。薄明薄暮に飛来して採食する行動は日周行動とも思われ、本種の生態・習性を理解する上で貴重なデータと思われる。また、ビオトープ機能もあわせ持つ公園施設としては、本種の飛来があり得る空間として認識し、環境整備や維持管理に配慮していきたいと考えている。



センサーカメラで撮影されたオシドリ（左2020.3.15/右2021.1.31）